

### 3. 事例紹介

以下ではモデル事業における施設での福祉用具活用の事例を紹介します。

A4ア2

介護老人福祉施設

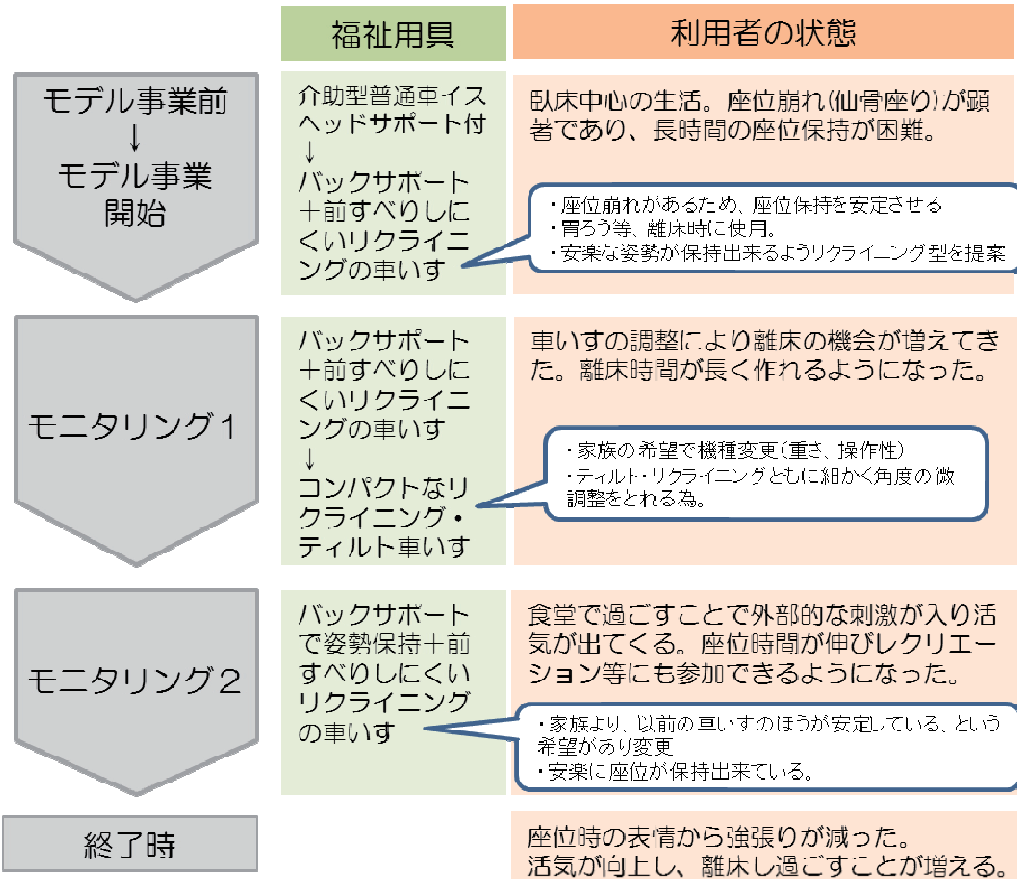
車いす

**事例1** 89歳 男性 脳梗塞・頭部挫傷  
腰部脊柱管狭窄症・左大腿骨転子部骨折

車いすを利用することで座位が安定し、離床時間が長くなり、食堂で過ごすなど他者との交流によって活気が出てきた。移動能力が向上、近距離の歩行訓練も開始。

目標

- ・入所したばかりのため、新しい環境になれて暗視して過ごしていけるように支援する。
- ・車いすに座って過ごす時間を増やし、他の利用者との交流や行事への参加など楽しく過ごす。
- ・車いすでの姿勢が安定し、身体が傾かないようにする。



#### 職員の意見

利用者一人ひとりに合わせた福祉用具を使用することでAOLの向上が見られた。介護職員の福祉用具に対する意識が向上した。【介護職員】

施設福祉用具は一般的なものが多く、入所者一人ひとりに最適な福祉用具を提供することは難しい。入所者の活動状況や体調には変化があり、多種多様な福祉用具を選択出来るようになれば入所者の自立支援方法の選択肢が増すと思われる。【機能訓練指導員】

**事例2** 81歳 女性 左大腿骨転子部骨折、腰椎圧迫骨折

身体状況にあった車いすを導入して姿勢の崩れと腰痛を防ぎ、自力駆動、自力での食事が可能となった。積極的な離床につながり、できることが増加し、生活への意欲が高まり笑顔が増えた。介助負担も軽減した。

**目標** 姿勢の崩れによるADL（食事動作や車いす駆動等）の介助量軽減、出来る事を増やすように支援する。腰痛の軽減、悪化予防を行う。

	福祉用具	利用者の状態
モデル事業前 ↓ モデル事業開始	普通型車いす 【施設備品】 ↓ ウィング・スウィングアウト車いす +自己膨張クッション	痛みが強く、車いす上での姿勢の崩れが強かった為積極的な離床に繋がらない。座位時も姿勢が崩れ、ADL介助量の増加、離床時間も短い状況
モニタリング1	ウィング・スウィングアウト車いす +自己膨張クッション	車いすの適合、調整により姿勢は良好となり、食事摂取が自力で可能、時間の短縮に繋がり本人のできる事の増加や、身体的負担の軽減につながった。腰痛も軽減し、離床時間が延長。
モニタリング2	ウィング・スウィングアウト車いす +自己膨張クッション	体の幅にあった車いすに変更し、自力駆動が可能となったこと、姿勢が安定したこと生活への意欲、モチベーションが向上し、笑顔が増えた。また、腰痛の軽減が積極的な離床に繋がった。介助量も減少。
終了時		上記の状態を維持。

**職員の意見**

利用者さんのできることが増えるのを見るのは嬉しい。環境設定が大事だということに気付かされた。【介護職員】

選定については難しいが、詳しいスタッフがいると助かる。利用者さんのためにも実現すべき。【看護職員】

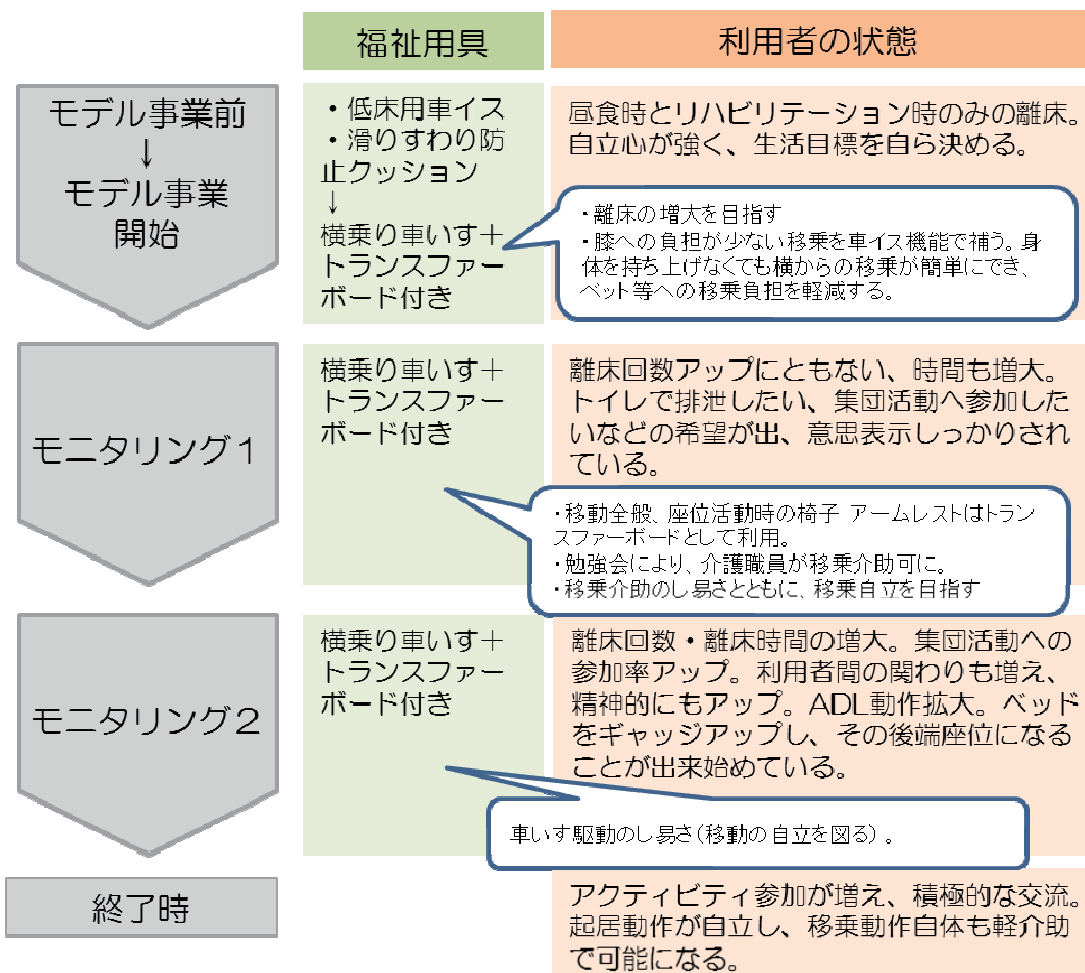
選択肢の幅が広がるのはとても大事なことです。適合しない道具を使い続けることが機能低下につながることを、適合する道具が機能向上につながることを再認識した。【機能訓練指導員】

事例3 ●歳●性 関節リウマチ 頸髄症 右人工関節置換術

昼食時とリハビリテーション時のみ離床の生活から、用具を活用することで、移乗介助のしやすさや移動の自立を目指した。離床時間が長くなり、活動が拡大して積極的な交流が増えるとともに、ADLが拡大し、起居、座位、トイレへの移乗が改善した。

目標

- ・ベッド上での生活から離床した生活へ。活動的な施設生活を送る。
- ・本人の希望に添い、生活の質を高めるよう支援する。
- ・生活活動を拡大し、移乗の自立 ADL動作の獲得を目指す。



・離床の増大を目指す  
・膝への負担が少ない移乗を車イス機能で補う。身体を持ち上げなくても横からの移乗が簡単にでき、ベッド等への移乗負担を軽減する。

・移動全般、座位活動時の椅子 アームレストはトランスファーボードとして利用。  
・勉強会により、介護職員が移乗介助可に。  
・移乗介助のし易さとともに、移乗自立を目指す

車いす駆動のし易さ(移動の自立を図る)。

職員の意見

日常生活に変化が見られ、意欲が向上した。恒々にあった福祉用具を選定することの大切さを改めて実感した。【介護職員】

施設でのレンタルが可能となれば、長期入所者に対して、より個別な対応がスムーズに行えるのでは。【看護職員】

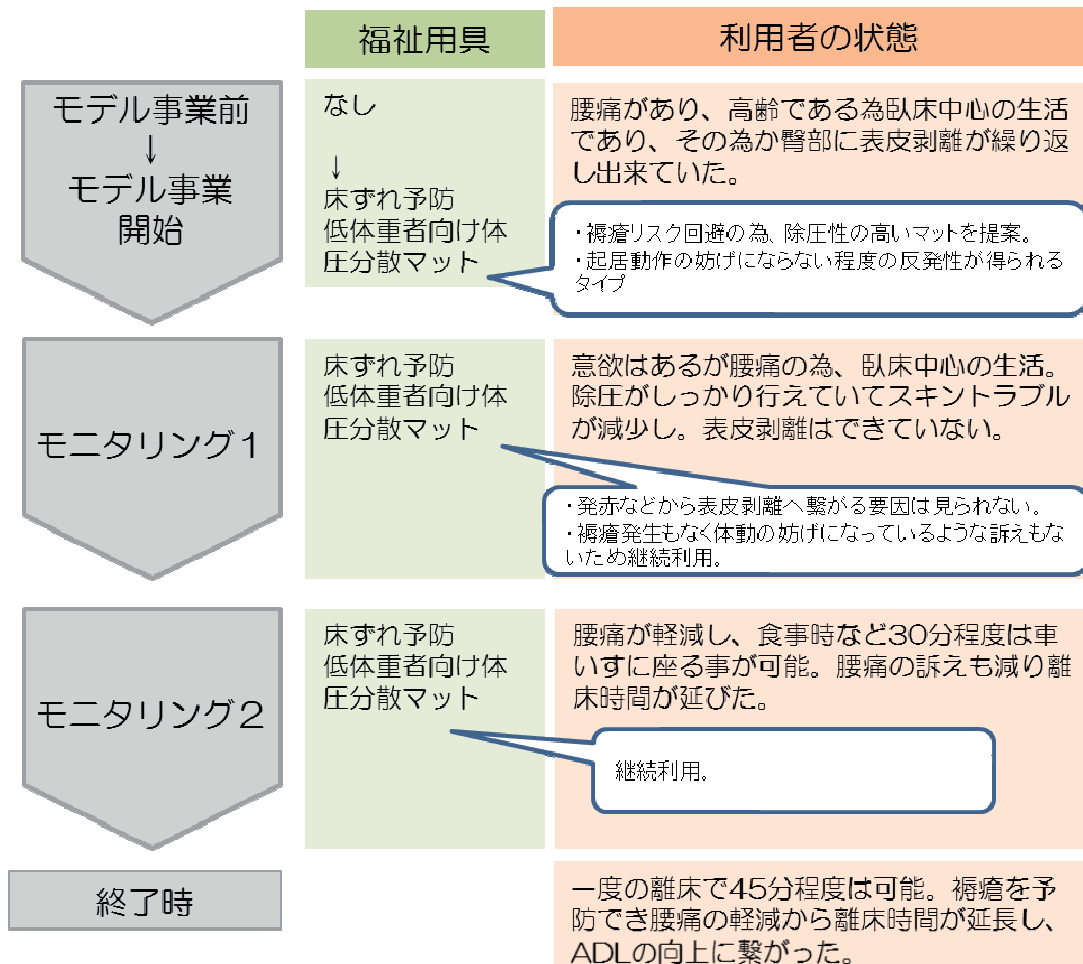
入所中に利用しそのまま在宅復帰時、自宅で使用することが可能であれば、慣れた物的環境下で生活を送ることも出来、セラピスト側もリハ内容をアプローチしやすい。【機能訓練指導員】

## 事例4 103歳 女性 慢性心不全・骨粗鬆症・変形性脊椎症

臥床中心の生活で表皮剥離、床ずれのリスクが高かったが、除圧性が高く、起居動作の妨げにならない程度の反発性が得られるタイプのマットを導入した。腰痛が軽減し、表皮剥離も発生せず、離床時間が徐々に長くなり、ADL向上につながっている。

## 目標

- ・体調変化を早期発見し、皮膚状態が悪化しないように注意する。家族と協力し少しでも食事を食べていただけるように支援する。
- ・介助量の軽減・疼痛の緩和



## 職員の意見

・施設では、現在ある福祉用具を何とかあてはめて利用している。居宅同様、ご本人に合った福祉用具を利用することが、生活の質の向上につながる。状態が変わる利用者全て合わせて購入することは不可能なのでレンタルが望ましい。【介護支援専門員】

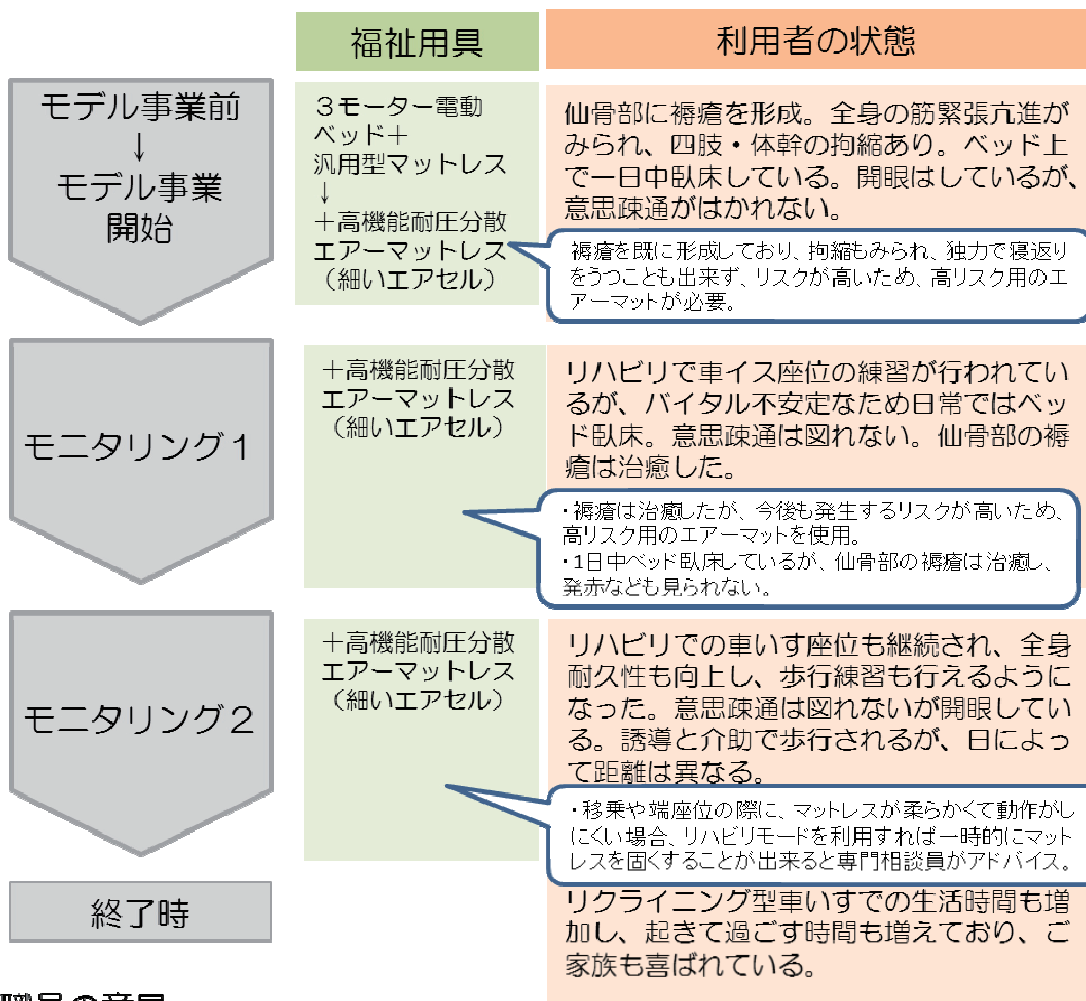
褥瘡予防においても福祉用具が職員の手助けに繋がる。福祉用具のレンタルによりケアだけでは対応しきれない部分に幅広く対応できるのではないかと。【看護職員】

事例5 84歳 男性 びまん性レビー小体病

一日中臥床している生活で、拘縮もみられ、独力で寝返りをうつことも出来ず、仙骨部に褥瘡を形成していたが、高リスク用のエアマットを導入することにより短期間で治癒。

目標

- ・日中、ベッドから離れた生活ができるようになりたい。
- ・栄養管理、脱水防止を図り体調を整える。個別リハビリ訓練で、身体機能の維持を支援。
- ・体位変換や清潔保持・観察等で褥瘡を形成しないよう注意。入浴や口腔ケアで清潔を保持。



職員の意見

褥瘡が完治するまで長期間かかっていた利用者が、エアマットの導入により週単位の短い期間で完治することができた。必要な利用者に必要なタイミングで導入できることは効果的。利用者のQOLが向上でき、より快適な施設生活がすごせる。【介護支援専門員】

こまめな体位変換などの対応はもちろん、今回エアマットの利用により、褥瘡が速やかに治癒できた。環境を整えることが大切であると再認識できた。【看護職員】

参考：連携プロセスと各職種の役割

連携プロセス	福祉用具 管理担当者	リハ専門職	介護支援 専門員	介護職員	看護職員	福祉用具 貸与事業所
1. 体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>施設の体制を統括し、貸与事業所の窓口になる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リハビリテーションの専門的立場から体制に参加</li> <li>勉強会などを主催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ケアマネジメントの立場から体制に参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>常に利用者に接する介護職員の立場から体制に参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護の立場から体制に参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>施設との協力関係の構築</li> </ul>
2. アセスメント		<ul style="list-style-type: none"> <li>リハ専門職の立場から、利用者の心身の状況に関する情報を収集、共有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用者のアセスメントを行い、ケアプラン上に福祉用具利用も目的を位置づけ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>介護職員の立場から、利用者の心身の状況に関する情報を収集、共有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護職員の立場から、利用者の心身の状況に関する情報を収集、共有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>施設からのアセスメント情報を得るとともに、福祉用具専門相談員の立場からアセスメント</li> </ul>
3. カンファレンスの開催	<ul style="list-style-type: none"> <li>福祉用具の利用、管理の立場から参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リハ専門職の立場から利用者の機能維持・向上に向けて助言</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カンファレンスを開催、各職種からの意見を求めて集約する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>介護職員の立場から、カンファレンスに参加し情報発信、意見を述べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護職員の立場から、カンファレンスに参加し情報発信、意見を述べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カンファレンスに参加し、福祉用具に関する情報提供、意見交換を行う</li> </ul>
4. 用具の選定	<ul style="list-style-type: none"> <li>貸与事業所、施設内関係者と協議して福祉用具を選定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>貸与事業所、施設内関係者と協議して福祉用具を選定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他の職種の意見も聴取し、福祉用具の利用をケアプランに位置づけ</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>施設関係者との協議により選定</li> <li>選択肢提示、提案</li> </ul>
5. 搬入・適合・利用指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>貸与事業所と日程調整し、立ち会う</li> <li>施設内関係者が利用指導を受けられるよう調整</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用指導場面に立ち会い、専門的立場から助言</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用指導場面に立ち会い、ケアプラン上の福祉用具利用目的を再確認</li> <li>利用方法を理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用指導場面に立ち会い、利用方法、注意事項、観察ポイント等を理解</li> <li>福祉用具利用目的を再確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用指導場面に立ち会う</li> <li>福祉用具利用目的を再確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>用具の搬入、設置、適合を行う</li> <li>利用者、介護職員をはじめ関係者に利用指導を行う</li> </ul>
6. モニタリング	<ul style="list-style-type: none"> <li>福祉用具の利用状況の把握、用具の管理</li> <li>施設内での気づき事項を集約し、貸与事業所に伝える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リハビリテーションや生活場面での気づきを記録し、関係者の間で共有する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各職種からの報告を受け、ケアプランの見直し等に反映する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常のケア場面での気づきを記録し、関係者の間で共有する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護を行う中での気づきを記録し、関係者の間で共有する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>定期的に施設を訪問し、施設関係者からの情報提供を得るとともに利用状況等を確認する</li> </ul>

高齢者施設等の特性に対応した福祉用具利用の効果的な運用体制に関する実証研究

運用マニュアル

---

平成26年3月 発行

発行者 一般社団法人 日本福祉用具供給協会  
〒105-0013 東京都港区浜松町2-7-15  
TEL 03-6721-5222  
FAX 03-3434-3414

---

本事業は、平成25年度 老人保健事業推進費等補助金の助成を受け、行ったものです。